

2025 年 12 月期 第 3 四半期 決算説明会 質疑応答の内容

<2025 年 11 月 13 日に開催した決算説明会における質疑応答の概要です>

**質問者 1**：精密・電子事業の受注計画を 200 億円下方修正した背景について。

**淵田**：200 億円の下方修正は、グローバル先端顧客の動向は想定どおりだったが、主にメモリ顧客からの受注に若干ずれが生じたため行った。

**質問者 1**：2026 年の半導体前工程製造装置市場の見通しと、貴社の売上収益の方向性、特にデバイス種別の見解は。

**淵田**：2026 年については、グローバル先端のファウンドリ顧客は引き続き堅調である。成長の度合いは、前期から今期へのステップアップよりもマイルドになる見込みだが、今期よりは伸びる方向で捉えている。メモリの遅れや中国での需要動向も鑑みると、市場環境は今期よりも若干良いものの、成長度合いについては見定めている最中である。

**質問者 1**：めっき装置の動向について、概算の売上規模と、WMCM や PLP 向けといった先端分野での状況は。

**淵田**：めっき装置の実績は、当社では精密・電子事業の「その他」セグメントに含まれる。前期受注 140 億円に対して、今期見込んでいるのは 130 億円で、ほぼ前期並みと予想している。売上収益については、昨年度の受注残消化があり、当期は 140 億円を見込んでいる。後工程アドバンスドパッケージ向けで、ある程度の受注が入ってきている。

**質問者 2**：CMP 装置の第 3 四半期受注が前期比で減少した要因と、第 4 四半期計画の案件の内訳、およびその達成確度は。

**淵田**：第 3 四半期から第 4 四半期へ 200 億円程度の受注が期ずれしており、これには中国（ノンメモリ）向けやメモリ向け案件が含まれている。第 4 四半期の受注見込みは、案件別に積み上げて算出しており、確度が高いものとして捉えている。

**質問者 2**：過去と比較して第 4 四半期に受注が集中する理由は。

**淵田**：案件ごとに見通しを積み上げた結果の数字であり、特定の季節性があるということではない。

**質問者 2**：連結営業利益の第 3 四半期着地と、第 4 四半期見通しについて教えてほしい。営業利益増加の要因や確度は。

**淵田**：第 3 四半期の営業利益は、セグメント別に見ても概ね見通しどおりである。精密・電子事業では、第 4 四半期に営業利益が偏重し、第 3 四半期はやや弱めに見えるが、これは顧客や案件ごとのプロダクトミックスの影響によるもので、特にサプライズはなく予想どおりである。第 4 四半期については、環境事業での上方修正に加え、コスト構造を再度見直したことで、営業利益の増加は確実に見込める状況である。精密・電子事業も、受注残の引き渡し見込みを踏まえると、第 4 四半期に高い確度で売上収益と営業利益が計上される見通しであり、全社として十分達成可能であると考えている。

**質問者 3**：北米のデータセンター向け建築事業の受注引き合いは直近でさらに増えているのか、また中国市場からの引き合いはあるのか。

**淵田**：北米向けデータセンターの受注は加速度的に増加しているわけではなく、基本的に継続して好調であり、変わらず良い状況である。中国市場については、現時点でそれほど引き合いはない。

**質問者 3**：エネルギー事業において、オイル&ガスの設備投資は今後動くと見てよいか。

**淵田**：第 3 四半期の実績として、LNG 向け当社クライオポンプの受注が出ており、設備投資は動き始めていると見ている。中東市場も基本的に安定的に推移すると考えている。石油価格や需給状況等の懸念はあるものの、現場での肌感としては全く動かない状況ではなく、投資マインドは回復傾向にあるとみている。

**質問者 3**：今期のエネルギー事業の受注計画は弱めだが、来期の見通しは。

**淵田**：LNG 向け受注は今年より若干増加すると見ている。石油化学分野も堅調であるが、S&S 分野は投資サイクルの谷に入る可能性があるため、全体の市場環境は良い面と悪い面が混在している。

**質問者 4**：精密・電子事業の通期受注予想を 200 億円下方修正したが、グローバル先端のファウンドリ顧客の動向に変化はあるのか。

**淵田**：特段大きな変化は見られない。今回の 200 億円の下方修正はあるが、前年度の受注実績 2,600 億円に対して今期の受注は 3,000 億円と 15%増を見込んでおり、市場の伸び以上に獲得できる見込みである。メモリ以外のロジック・ファウンドリ向けの動きについては特段大きな変化は見込んでいない。

**質問者 4**：昨年も第 3 四半期時点で公表された第 4 四半期の予想計画が高く未達に終わったが、今年は昨年と比べて達成できる手応えに違いはあるのか。

**淵田**：昨年度の第 4 四半期の見通しと実績のずれは真摯に受け止め、社内プロセスを見直した上で現状の数字を示している状況である。今年は第 3 四半期の時点で、第 4 四半期の案件を改めて積み上げ、蓋然性が高い数値と考えている。

**質問者 4**：熊本の K3 工場は、今後本格的に CMP の製造を行う予定はあるのか。キャパシティの拡張や進捗状況を教えてほしい。

**淵田 [M]**：K3 棟は、生産能力向上やスループット拡充を目的とした機能を有しておりすでにリードタイム削減や生産量増加の要となっている。製造キャパシティは着実に向上している状況である。

CMP 装置は現在の製造キャパシティで、需要に対応できており、若干の余裕もあるため、現状では問題ないと考えている。

**質問者 5**：エネルギー事業のエチレン向けコンプレッサについて、エチレン価格の下落が需要に与える影響やリスクはあるのか。

**淵田**：エチレン価格は増減するものの、全体としての需要は引き続き堅調である。中国市場では減速が見られるが、中国以外の地域は堅調に推移しており、市場取引の状況からも同様に堅調と見ている。

**質問者 6**：精密・電子分野について、2026 年度も堅調とのことだが、2028 年頃に AI サーバー需要が踊り場になるとの予測もある。半導体関連特有のボラティリティを何年以内にリスクとして織り込む予定か。また、当面は 2035 年まで直線的に成長すると考えてよいか。

**淵田**：現在、中期経営計画や長期計画は策定中であり、ボラティリティの谷がいつ訪れるかの予測は非常に難しく、現実的には織り込んでいない。基本的には中長期で半導体市場が成長していく

蓋然性は高いと見ており、それに基づき研究開発や設備投資、マーケティング等の計画を立てている。実際には需要の動向がシャープに変動することもあるが、総じて成長は続くと考えている。

**質問者 7：**今回の上方修正要因の一つに精密・電子事業における固定費削減があったが、修正後計画の営業利益率が17%で据え置かれている背景は。

**淵田：**全体として収益性を向上させる方向で捉えている。ただし、研究開発費を削減しているわけではない。営業利益率については、今年度は中国向け売上案件の比率低下などプロダクトミックスの影響もあり、前年比マイナス1%の17%を目標として設定している。各種施策の実現可能性が見えてきている中で、市場環境やプロダクトミックスを踏まえれば十分野心的な目標であると評価している。これが最終ゴールではなく、今後も営業利益率向上に向けた取り組みを継続していく考えである。

**質問者 8：**精密・電子事業の中国市場の現状と今後の見通しをどのように評価しているか。

**淵田：**足元の需要は前年度と比べて横ばいか若干微減程度であると見ている。今後の見通しは不透明な面もあるが、この低下傾向が長期的に続くとは考えていない。昨年は比較的好調であったため、急激に戻るとは想定していないが、横ばい程度で推移すると捉えている。市場動向は日々変化するため、説明会などの場を通じて、可能な限り鮮度の高い情報を提供していく考えである。

**質問者 9：**HBMの動向について教えてほしい。来年、大手メーカーがHBM関連投資を大幅に削減する通達を出しているが、貴社にも影響はあるのか。

**淵田：**現状、当社としてのHBM関連需要は増加していると捉えている。しかし、大手メーカーによる投資削減があればその影響が若干出る可能性はあり、今後もこのような投資動向による影響も注視していく。

以上